

子どもの感性を育てる

～言語表現力を育てるを通して～

阿川 士郎

Bringing up children's sensitivity ; through bringing up verbal expression

Shirou Agawa

子どもは、元来豊かな感性を持っている。しかし、その感性も成長につれて萎えてしまうことが多い。子どもの感性を磨き、さらに豊かにしていくためには、周囲の大人の関わりが大きく影響する。

感性は、表現を伴って初めて認知することができる。文章表現力を付けることが大切であるが、中でも感動を的確な言葉で表現する詩の指導は、子どもの感性をより豊かにする上で欠かせない。

Keywords : 子どもの感性、言語表現力、文章表現力、詩の指導

1. はじめに

1) 子どもは、元来豊かな感性を持っている

感性とは、「外界からの刺激によって何らかの印象を感じとることができる直感的・受動的な能力」(学研国語大辞典 学習研究社)と、辞書的には規定されているが、ここでは、「ものごとに触れて感じる心の働き」ととらえておきたい。

感性は心の働きであるから、そのままでは感性をとらえることはできない。何らかの表現を伴って初めてその感性を知ることができ、その感性が活かされることになる。

表情、絵画、音楽、身体表現、言語表現等、表現にはいろいろあるが、一番とらえやすく、人間形成にかかわる言語表現にしばって、ここでは考えることにする。

< 幼 児 の 感 性 >

☆「おめでとう」って ことば くすぐったいね。(どうして?)

ほく、きのう おたんじょうびで おばあちゃんや おとうさんが

「おめでとう」って いった とき からだが くすぐったかったもん。

☆きのうの くうきは とっても おもかったよ。おとなりの おじちゃんが

みえたから むかえに いこうとして かけだして ころんだとき

せなかに いっぱい くうきが のっかって おきる とき とっても

おもかったよ。

☆スナオって なんなの。 あたしは スナオで ないんだってさ。

おんなは スナオでないと およめに いけないんだって。おかあちゃん
あたしのこと スナオにして およめに やっちゃいたいのかしらね。あたし
いきたくないから スナオに ならないの。

(「ちがうぼくと とりかえて」 より)

子どもは、元来豊かな感性を持っている。見るもの聞くものが新鮮であり、柔軟な心をしているので、何でも受け入れることができる。そして、それは子どもにとって感動的なことであるから、その感動をなんとかして周囲の人に伝えようとする。

言葉を持たない乳児であれば、泣いたり笑ったり、手足をばたつかせたりして表現しようとする。幼児になれば、たどたどしいながらも言葉で何とか表現しようとする。そして、それがうまく表現できないとかんしゃくを起こしたりする。理解語彙や表現語彙が増えてくると、心に感じたことを言葉でうまく表現できるようになり、周囲の人にそれを伝えることができ、子どもは安定を得る。

2) 周囲の環境が感性を萎えさせている

上記のように幼児のころは、みんな素晴らしい感性を持っていて、それを素直に表現することができる。しかし、成長するにつれて、多くの場合この素晴らしい感性が萎えてくる。それはなぜか、考えてみたい。

一つには、子どもの感性が周囲の大人に受け入れられない、ということが上げられる。例えば、子どもの発見や驚きに対して、「そんなのあたりまえよ。」と片付けられたり聞き流されたりしたら、子どもは、二度と表現しなくなる。そして、やがて感性そのものが萎えてしまうことになる。

二つには、受け身の文化に慣らされた主体性の少ない生活が上げられる。幼児の一人遊びを見ていると、一つのおもちゃでもいろいろに考えて、長いこと熱中して遊んでいる。自分で遊びを工夫しているのである。ところが、与えられるおもちゃが増えるにしたがって、一つのおもちゃで遊ぶ時間が短くなり、すぐに他のおもちゃを求めるようになる。そして、やがて自分で遊びを考えることはしなくなり、感性が萎えてしまうのである。

2. 子どもの感性を育てるために

子どもの感性を萎えさせることなく、育てていくためにはどうしたらいいか考えてみたい。

1) 子どもの感性（表現）をまるごと受け入れること、認めること

子どもが何か表現する時は、何か伝えたいこと、分かってほしいことがあるからである。表現がつかないために何をいっているのかすぐにはよく分からなかったり、大人の目から見ると当た

り前のことだったりする。

しかし、子どもは、聞いてほしいから表現する（話す）のであり、自分の発見（感動）を分かっ
てほしいから話すのである。そして、表現の機会を多く持つほど表現力は確かになり豊かになっ
ていくのである。周囲の大人はこのことをしっかり肝に命じておく必要がある。

まず、子どもの表現に耳を傾けることである。子どもの目線で聞き、表現している（表現しよ
うとしている）内容を理解しようと努めることが大切である。

2) 子どもと共に感動すること

子どもの感性（表現）に出合った時、周囲の大人がどのような反応をするかが問題である。「そ
んなこと当たり前よ。」と、子どもの感性を否定してしまうのはもってのほかである。そこまで
いなくても、「あ、そう。」と聞き流してしまうのも論外である。しかし、この聞き流しは、忙
しさを理由に案外と多いように思われる。

「素晴らしい発見ね。」「ぴったりの表現だね。気持ちがよく分かるよ。」「もっと見つけて教え
てね。」などと、共感したり賞賛したり価値付けたりすることが大切である。そのためには、大
人の目の高さではなく、子どもの目の高さでものごとを見たり考えたりすることが必要である。

3) 家庭が豊かな会話で包まれること

「おやつは?」「テーブルの上」、「宿題は?」「ない」などと単語ですませるような用件だけで
味気ない会話ではなく、1日の家族の体験を出し合うような、豊かな会話が家庭でなされれば、
子どもの表現力は豊かになり、感性も自動的に磨かれることになる。

「黙っていても心は通じている。それが家族だ。」と言う人もいるかも知れないが、子どもを育
てるという観点から言えば、それは間違っていると言わざるを得ない。腹を割って話し合ってこ
そ、心が通じ合うものだし、お互いの感性が触れ合うことによって、お互いの感性が磨かれるの
である。

4) のびのびと表現させること

自由な雰囲気の中でこそ、思っていることがのびのびと表現できる。「こんなことを言ったら(書
いたら)、お母さんに……」「こんなことを言ったら、先生は……」などと考えると、素直な表現
ができない。何でも話せる、何でも書ける雰囲気をつくるよう努力することが大切である。

5) 観動体験を多く持たせること

感動とは、「ものごとに強く心を動かされること。」(学研 国語大辞典 学習研究社)である。
そういう感動は、嬉しいこと、楽しいこと、おもしろいこと（「プラスの感動」ということにする。）
ばかりではない。悲しいこと、嫌なこと、腹立たしいこと（「マイナスの感動」ということにする。）
などもある。

プラスの感動が多くある方がいいことは言うまでもないが、人生は山あり谷ありで、いつもプ
ラスの感動ばかりではない。マイナスの感動に出合った時、それをどう乗り越えるかは、その人

のそれまでのマイナスの感動体験の多少や深さにかかわってくる。

子どものころ、あまりマイナスの感動体験を経験していない人は、人生の大きなマイナス体験に出合った時、挫折してしまい、立ち上がることができなくなる。

そういう意味において、「小動物を飼って、その死に出会う」という体験（「小動物を飼う」のは、プラスの体験だが、「その死に出会う」のは、マイナスの体験である。）は、その子の人生において貴重な体験となる。命あるものは必ず死を迎える。そのことを体験を通して認識しておくことが、やがて出会うであろう身近な人の死を、しっかりと受け止めるために大切である。

また、マイナスの感動体験によって、人の立場を理解し、思いやりの心が育つということもある。忍耐力なども、マイナスの感動体験から生まれてくるといえることができると思う。

6) 豊かな感性に出合わせる

感性は、表現を伴って初めて人に認識される。優れた感性（表現）は、それに触れる人の感性を刺激し、その人の感性を高める。

(1) 音楽を聞いたり美術展を見たりする

あわただしく過ぎ去る日々の生活の中で、ちょっと一息入れて、音楽に耳を傾けたり、絵や彫刻や写真や書等を見て、じっくりと味わったりすることは、感性を育てる上でとても大切なことである。ものごとに感じる心をしっかりと耕すことにつながる。この心が耕されていないと、いくら感動体験をしても、心に響かず表現に至らない。

(2) 物語や作文・詩を読む

物語や作文・詩を読むことによって、間接的に体験活動をすることができる。また、登場人物（話者）や筆者を通して、素晴らしい感性（表現）に出会うことができる。

とりわけ、詩に親しむことを是非勧めたい。詩は、感動を表現したものである。まさに感性の表れである。同じことを体験しても、人によって感動の仕方が違い、表現の仕方も違う。人の詩を読むと、「そういうとらえ方もあるな。」とか「うまく表現しているな。」などと、驚いたり共感したりして感性が刺激され、自分も詩を書いてみようという気になったりする。

感動体験をした後に、その体験について感想を話し合うことも大切である。家族でのこの話し合いが、子どもの表現を高めるもとになる。

秋	3年 女 (Y・N)
さー さー	やさしく、
カーテンがゆれる。	わたしにも
	風があたる。
しずかに、	
さらさら	心がゆたかになる。
木の葉がおどる。	

(「子どもの詩を読む 我がクラスの詩」より)

この詩は、3年生らしからぬ感性で、しみじみとした秋の素晴らしさを歌った詩である。

くさー さーとくカーテンをくゆ>らしくしずかに、／さらさら 木の葉をくおど>らせるく風>は、くわたしにもくあたるく風>と同じ、くやさし>いものなのだ。

このくやさし>いく風>にくあた>りながら、くカーテンがゆれる。>様子やく木の葉がおどる。>様子をじっと見ていると、く心がゆたかになる。>と彼女は感じるのである。

これは、単にやさしい秋風から受ける感じではなく、秋真っ只中に身を置いた時の感じなのである。だからこそ、彼女は、題を「秋の風」や「秋風」としないで、「秋」としたのだと思う。素晴らしい感性の持ち主である。おしゃまな3年生の女の子の姿が浮かび上がってくる。

3. 文章表現力を付ける

感性を育てるという観点から考えると、言語表現の中でもとりわけ文章表現が重要である。音声表現はその場限りで消えてしまうが、文章表現は後に残すことができ、読み直すことやその場にいない人にも伝えることができる。したがって、子どもたちに文章表現力を付けることが重要となるのである。

1) 書くことに慣れさせる

書くことに抵抗を示すようでは文章表現力は身に付かない。「好きこそものの上手なれ」という諺があるように、書くことが好きな子にしたい。そこまでできなくとも、せめて書くことを面倒がらない子に育てたい。そのためには、書くことに慣れさせることが必要である。

(1) 「先生、あのね」 「日記」

低学年は「先生、あのね」、中学年、高学年は「日記」を書かせる。毎日書くことが大切なので、ノート（「先生、あのね」帳、「日記」帳）は2冊持たせる。そうすれば、1冊に子どもが書いていても、もう1冊を教師が見ることができる。

書き慣れるという点からはただ書くだけでも価値があるが、とにかく出来事の羅列になり、焦点の定まらないものになりやすい。それでは感性を育てることにつながらない。

そこで、「題を書いて文を書く」ように指導する。そうすれば、題にかかわりのないことは書かなくなり、まとまりのある文、気持ちの分かる（感性の感じられる）文にすることができる。

《 「先生、あのね」 の例 》

○ 十月二日 木曜日 2年 男 (S・M)

「おかあさんのたん生日」

十月五日は、おかあさんのたん生日です。うんどう会とおなじ日です。

プレゼントは、百八十円のなしと、かたをもんだりしてあげます。おかあさんは、「年をとるのはいやだけど、プレゼントがたのしみだわ。」

といっています。ほくも、おかあさんのたん生日がたのしみです。まい日、

「あとなん日。あとなん日で、プレゼントがあげられる。」

とっています。お手紙もあげます。リボンをつけてあげます。もう、百八十円たまっています。でも、百九十円にね上がりするとたいへんです。

おかあさんも、早くプレゼントがほしいと思っているにちがいありません。うんどう会の日なんて、めずらしいなあと思います。

ぼくのあげるプレゼントを、一日でも早くたべてほしいです。いつも、早くおかあさんのたん生日が来ないかなあと、たのしみにまっています。

ぼくは、年のことなんか気にしません。プレゼントでよろこんでほしいと思っています。早くおかあさんのたん生日、来い。

(「先生、あのね」 神戸大学教育学部附属住吉小学校2年い組 より)

《「日記」の例》

○ 五月八日(金)

5年 女(M・S)

「参観日」

今日は、参観日でした。

わたしは、4年生のころまで、ずっとあまり手を上げて発表しなかったのですが、5年生になって、なるべく手をたくさん上げるようにがんばろうと決心しました。

このごろ手を上げていませんでした。でも、今日は参観日で、先生やほかのお母さんたちに、あの子はわからないのかしら、と思われるのはいやだから、なるべくわかっているものには手を上げました。

自信があまりないものには、まちがっていたらはずかしいとか思って、手を上げられませんでした。それに、きんちょうしてしまうので。

でも、今日、1回は発表しました。とてもドキドキしました。でも、その時、まだお母さんは来ていませんでした。ちょっぴり残念で、それでいて、少しホッとしたような気分でした。それから、何回か手を上げましたが、あたりませんでした。

参観日の時、あたらなくてもお母さんたちの前で手を上げるのは、いい気分だと思います。今まで手を上げなかったので、参観日っていやだな、と思っていたけれど、少しでも手を上げるようになって、発表すると、スウッとなんだか気持ちよいので、参観日も前よりずっと好きになりました。

(「みんなの日記」 山口市立平川小学校5年3組 より)

どのような「先生、あのね」や「日記」を書けばいいのか、よく分からない子どももいるので、日直(当番)の「先生、あのね」や「日記」を終わりの会で読ませるようにする。そして、よかったところを見つけさせたり分かりにくいところを質問させたりする。さらに、最後に教師が、よかったところを誉め、こうするともっと分かりやすくなるということを指導するようにするといふ。

また、学期に1度、自分の書いた「先生、あのね」や「日記」の中から、一番よく書けていると思うものを清書して出させ、それを日付順にまとめて文集にし、学級全員に配って読み合うようにすることも、よりよい「先生、あのね」や「日記」を書かせる上で有効である。

(2) 作文指導

「先生、あのね」や「日記」の指導をしっかりとしていれば、作文指導はあまりしなくてもいいかという、決してそうではない。「先生、あのね」や「日記」では、短くてまとまりのある文章を書くという力は付くが、長文を書く力や論理的な文章を書く力は付かない。したがって、作文の年間計画をしっかりと立てて、こまめに指導することが大切である。

実際の教育現場で作文指導が十分には行われていない原因の一つに、書かせた後の処理の問題がある。

書かせただけでは、指導が十分に行われたとは言えない。書いた作品に対する評価が大切である。どこがよくてどこが不十分だったのかが、書いた本人に分からないと、次に書く作文に生かされない。

しかし、一人一人の作文に対して、評価・批評を赤ペンで書いていくことは、教師にとって大変な労力を要することである。したがって、書かせればなしになったり子どもが書いたことさえ忘れた頃に返したりということになりやすい。それでは評価の意味がない。評価（教師の反応）は、早いほどいいということも言うまでもない。

一人一人の作文に評価・批評をその都度書いて、できるだけ早く返すのが理想だが、十分に時間が取れないために書かせる回数を少なくしているというのが現状であろう。

その弊害をなくす評価・批評の工夫について考えてみたい。

それは、子ども同士による相互評価である。

男女混合の5, 6人のグループを作り、グループの作文をそのまま1冊にまとめて文集にする。文集の終わりにお互いが批評・感想を書き込むための用紙を数枚入れておく。そして、グループ内で回覧して批評を書くのである。最後のページには教師が書き込む欄も用意しておく。この相互評価を重ねるうちに、子どもたちの作文を読む目も育ってきて教師の書き加えることが少なくなってくる。

教師の評価・批評の観点としては、次の3点を挙げることができる。

<作文の評価・批評（赤ペン）で、何を書くか>

- まず、よいところをできるだけ見つけ、しっかり誉める。
 - ・ 書き出しがとても上手に書けています。次を読みたいという気にさせます。
 - ・ したことの順序がよく分かるようにかけているので、“うれしかった”というあなたの気持ちが伝わってきます。
 - ・ お母さんや弟の言った言葉をうまく取り入れて書いているので、文章が生き生きしています。

- 次に、共感の文を付け加える。
 - ・ 君の怒る気持ちはとてもよく分かります。やはり初めに言ったことは最後まで貫いてほしいですね。
 - ・ さなぎからちょうちょうが生まれた時は、嬉しかったでしょうね。あなたの喜んでいる顔が見えるようです。
 - ・ 泣き声の大きい、元気のいい赤ちゃんのようですね。妹が生まれてよかったですね。
- そして、注意を付け足す。
 - ・ “うれしい”という言葉を使わないで、その時のあなたの心の動きを書くと、気持ちがよく伝わりますよ。
 - ・ 結論は分かりやすく書いていますが、結論を導く本論の部分に具体例をもう一つ入れると、もっとよく分かるのではないのでしょうか。
 - ・ 自分の気持ちをたくさん書いていますが、その時の様子を詳しく書いた方が、もっと気持ちを強く伝えることができますよ。

(3) 授業の中で

平成20年改訂の小学校学習指導要領では、第1章総則第4の2の(1)に「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」と述べ、言語活動、とりわけ言語表現力の育成を重視している。

「各教科等の指導に当たっては」とあるように、国語科の指導に限らず他の教科等の指導においても、言語表現力の育成を求めているのである。

そこで、ここでは、これまでの各教科等の授業における書く活動を問い直してみたい。

一時間の授業の過程に、「書く」という活動を位置付けるということは、これまでもよく行ってきたことである。しかし、時間がかかり過ぎて学習目標が達成できなかったとか、書かせたけれど書かせたことがその授業の中で生かされなかった等の反省も多い。何のために、何を書かせるのか、ということについて十分に検討を加えなければならない。

そこで、「子どもたちが、学習に意欲的に取り組み、学習目標への到達を容易にする書く活動」というところに観点をしぼって、授業における書く活動を問い直してみたい。

① 書くことの意義

- 自分の考えを深めたり広げたりしていくことができる。

書くことによって、ほんやりしていた自分の思いや考えが、はっきりしてくる。そして、さらにその思いや考えを深めたり広げたりしていくことが可能になる。
- 自分の考えの深まりや広がりの変化を知ることができる。

書きまとめたものを読み返すことによって、自分の考えの跡を振り返ることができる。

それは、自分自身の成長を知ることであり、学習すること、学習したことに対する喜びを感じることである。

② 書かせる時の留意点

書かせるに当たって、どういうことに留意すればよいかについて考えてみたい。

- 子どもたちが、意欲を持って、進んで書くことに取り組むようにする。

心に書くべきことがはっきりとらえられていれば、子どもはそれを何とかして表現しようとするであろう。

したがって、

●教材・事象との出合わせ方

●問題のとらえさせ方 等

の工夫をすることによって、子どもの心をゆさぶり、興味・関心・疑問・驚き・感動……を持たせるようにし、書くべきことを強く意識付けていくことが必要である。

- 子どもたちの個性的な考え、創造的な取り組みが自由に表れるようにする。

子どもは、元来、個性的であり創造的ではあるが、周囲の環境によって、その個性的・創造的なものが抑えられている場合が多い。

日々の取り組みにおいて、本当に子どもたちの個性的な考え、創造的な取り組みを大切にしているかという点について、反省してみなければならない。

●何でも言える、認め合う学習集団を学校生活全般を通じて育てているか。

●子どもの個性的な考えや創造的な取り組みに対して、常にそのよさを認めるようにしているか。

以上のことを踏まえて、一時間の授業の中では、具体的にどのようなことに配慮したらいいかについて述べることにする。

③ どのように書かせるか

子どもにとって、書くということは大変な仕事である。精神を集中させ、思考をフル回転しなければならない。当然書く時間の保障を必要とする。学習の効率ということも頭に置いて、学習目標と子どもの意識とを照らし合わせ、書かせるべきことは何かということを十分に検討しておかなければならない。

その際、課題だけ与えて、ノートに自由に書かせる場合もあるであろう。あるいは、ワークシートを与え、考えの筋を分かりやすくして書かせる場合もあろう。また、絵に吹き出しを付け、その中に限って書かせる場合もあろう。

いずれにせよ、学年発達、教科・教材の特質、子どもの興味・関心等を吟味した上で、どのように書かせるか決めなければならない。

④ いつ書かせるか

いつ書かせるかという問題は、当然、何を書かせるかという問題と関わってくる。

教材や事象との出会いにおいて、気づいたことや見通しを書き、そこから考えを発展させようとするような場合は、授業の初めの方の過程に、書く活動は位置付くであろう。

また、一時間の授業を振り返り、整理したりまとめたり、反省したり発展的な問題を考えたりするような場合には、授業の終末の過程に、位置付くであろう。

⑤ 書かせた後、どうするか

書くこと自体に意義があるが、その書かせたものをどうするかによって、さらに意義深いものへと高めていくことができる。

子どもの書いたものを、その授業中、あるいは、次時の授業に生かすようにすることが大切である。つまり、子どもの書いた考えを発表させ、学習の中で位置付けたり、自分の考えの変化や深まり、広がりを実感させたりすることである。

書いたものが生かされることによって、子どもたちは、書いたことに対する満足感を持ち、次時の書く活動に対しても、積極的に取り組むようになるであろう。

書くということは、自己を表現することである。心を開き、素直に自己を表現できる。そのことによって、自分の成長を実感することができ、子どもたちは、生き生きと授業に取り組む。このような子どもの姿が授業の随所に見られるようになることを願うのである。

2) 詩を書かせる

詩は、感動の表現である。したがって、詩を書くためには、まず感動を意識することが大切である。感動を捉えることができたなら、次に、その感動をどう表現すれば人に伝えることができるか、表現を工夫することになる。そうした過程の中で、子どもの感性はより磨かれていくことになると思う。

(1) 詩とは何か、理解させる

作品1

ぼくは、あさおきて、
かおをあらいました。
そして、
ごはんをたべて、
学校へ行きました。

作品2

やねにねこがねています。
どこからあがったのかわかりません。
きょうは、とうとうしれました。
うらのかきの木からあがりました。

作品1と作品2を比べることによって、詩は、「短く書いてある。行がえがしてある。表現が美しい。」などの、表面的なことで決まるのではなく、そこに感動（心の動き）があるかどうかで決まるということを理解させる。作品1は、単なる日常の行為を書いた文章であるが、作品2は、屋根の上にいるねこを見て、どこから上がったのかと不思議に思っていたが、裏の柿の木から上がったということが、やっと今日分かったという作者の感動を表した詩である。

(2) 詩は身近にある

詩とは何かということを理解させたらすぐに詩を書かせるというのではなく、詩の材料は自

分たちの身近にあるということをつからせることが大切である。

そのために、朝起きてから夜寝るまでの一日の生活の中から取材した子どもの詩を、毎日終わりの会等で1, 2編紹介する。その中に次のような詩も入れておくと、こんなことも詩になるのかと詩のイメージを広げることができる。

うんこ	2年 男 (N・M)
うんこは、	けむりもくさい。
いつもくさい。	ポトン。ポチャン。
しりからおちたら、	べんじょうにはいったら、
けむりがもこもこ。	ガスちゅうどく。
火山のようだ。	

へ	4年 男 (K・N)
ふとんにはいると、	ぷーんとした。
ぷっと出た。	目にしみるようなにおい。
ふとんを頭にかぶると、	あわててふとんをとった。

ごきぶり	5年 女 (N・N)
考えてみれば、	さっ虫ざいで、
あわれなもんだ。	おさらばだ。
小さいのは、	自分をごきぶりだったら…
スリッパでふんで、	思っただけで、
おさらばだ。	ぞーとする。
でかいやつは、	

(「子どもの詩を読む 我がクラスの詩」より)

詩の紹介を2, 3週間続けていると、あんなことも、こんなことも詩になるんだということが分かり、「先生、いつ詩を書くのですか。」とか「私も詩を書いてみたい。」という声が、子どもたちから上がってくる。その時が詩を書かせるチャンスである。

(3) 詩の批評会をする

子どもたちが作品を書いたならば、まずその作品が詩になっているかどうかの評価を早急に与えなければならない。例えば、A (感動がないから詩にならない。)、B (感動はあるので表現の工夫をしよう。)、C (詩としてまとまっている。)) というように子どもたちと約束を作っておくのである。そうすれば、Aの子は別の題材で詩を作ろうとし、Bの子は感動が伝わるように表現の仕方を工夫しようとし、Cの子は自信をもって新たな題材でまた詩を作ろうとする。教室に「詩のポスト」を用意して、詩が書けたらいつでも入れられるようにしておくといい。

作文の時間等を使って一斉に詩を書かせると、過去の感動を思い起こすことになり感動に新鮮さがない。したがって、表現の工夫に力が入り過ぎ、表現が大げさになったりしてかえって感動が伝わらないということになる。一斉に書かせた詩にあまりいい作品がないゆえんである。

「先生、あのね」や「日記」の中に素晴らしい子どもの感性（感動）を見出すことがしばしばある。その時は、「素晴らしい発見（表現）です。このことを詩に書いてみましょう。」と指示すると、ほとんどの子どもが詩に書いて翌日「詩のポスト」に入れている。こうして生まれた作品には、いいものが多い。

ある程度作品が集まったら詩集を発行する。そして、その詩集の批評会をする。

全部の詩を読んでいいなと思う作品を3編選ぶ。挙手によりその結果を確認し、票が多く入った作品から順に、みんなで批評をし合う。

批評会の進め方は次のとおりである。

- ① よかったと思うところを発表する。
- ② こうすればもっとよくなると思う点について、意見を言う。
- ③ 作者の気持ちを聞く。
- ④ 先生の批評を聞く。

次に、5年生の「批評会」の例を示す。これは、数回批評会を経験した後の例であり、子どもたちの育ちが感じられるものである。

《 詩 の 批 評 会 》

つ り 5年 男 (A・E)

ピリ、ピリと、	「パシャッ」
さおがふるえた。	水面をたたく大きな音。
うきが、	つれた。
ピコピコとひいている。	大きいふなが、
「かかった。」	ピンピンはねている。
そう思ったしゅん間、	ぼくは手でしっかりとつかんで、
勢いよくさおを上げた。	ふなをバケツに入れた。

T…E君に、自分の詩を読んでもらいましょう。

E…音読する。

T…まず、よかったと思うところを、選んだ人たちから言ってもらいましょう。

P…魚がかかった時のことが、＜ピリ、ピリと、／さおがふるえた。＞＜うきが、／ピコピコとひいている。＞で、よく分かります。

P…まずさおに当たりを感じて、よく見ると、＜ピコピコとひいている。＞のがかかったという、順番が分かります。

P…それは順番というよりも、ほとんど同時だと思います。

P…<「パシャッ」 /水面をたたく大きな音。>で、大きい魚がかかったということが分かります。

P…<大きいふなが、／ピンピンはねている。>というところは、K君の大物をつたという喜びが表れています。

P…<つれた。>というだけで、「うれしい」というような表現はないけれど、魚つりの様子が詳しく書いているので、詩全体から喜びが分かります。

T…こうしたらもっとよくなると思うところがあれば教えてください。

P…<大きいふなが、／ピンピンはねている。>という表現がありますが、どこではねているかを書くといいと思います。

T…例えば？

P…「大きいふなが、／つり上げられて、／ピンピンはねている。」この場合は、ふなは空中ではねていることになります。

「大きいふなが、／草の上で、／ピンピンはねている。」この場合は、ふなは岸の草の上ではねています。

T…なるほど、「つり上げられて」とか「草の上で」を入れると、ふながどんな状態ではねているのかが、具体的によく分かっていいですね。

ふなのいる場所だけでなく、さおがどうなっているのかも分かりますね。「つり上げられて」の場合は、さおは立っていることになります。「草の上で」の場合は、さおは横になっています。

T…このことについて、E君はどう思いますか。

E…ほくも、ふなの位置やさおの様子が分かった方がいいと思います。「つり上げられて」がいいと思います。

P…<つれた。>というところがありますが、これは、「つれた！」と叫んだのではないのでしょうか？ほくだったら叫びます。「 」を付けて叫んだように表現すると、喜びがもっとよく伝わってくると思いますが……。

E…その通りです。大きいふなだったので、思わず大声で「つれた！」と叫びました。

T…みなさんがいいところをたくさん見つけてくれましたが、先生の方で、もう一か所いいところを言っておきたいと思います。

それは、最後の、<ほくは手でしっかりとつかんで、／ふなをバケツに入れた。>というところですか。その中でも、特に<手でしっかりとつかんで>というところに、「にがしてなるものか」というような、E君の喜びの気持ちが表れているように思います。おそらくほんの数秒間のことなのでしょうが、必要なことだけを選んで適切に表現すると、作者の感動がよく伝わってくるということが分かったことでしょう。

先生がよく言っている、「様子を書いて、感動は伝える。」ということのお手本のようないい作品です。

T…それでは、最後にもう一度、E君に読んでもらいましょう。

(「児童詩の指導」より)

(4) 優れた作品に触れる

感動を人に伝えられるように表現できるようになるためには、数多く作品を書き、批評会を重ねるだけではなく、同年代の子どもたちの優れた作品に多く触れることも大切である。

そのためには、教師自身が子どもの優れた作品に多く触れ、これはと思う作品をたくさん手元を集めておくことが必要である。集めた詩を学年別に整理したりテーマ別に分けたりしておくといい。そうすることによって、子どもたちの実態に応じて、参考となる詩を適宜紹介することができるのである。

小さな親切

6年 女 (Y・M)

満員電車。

よろよろしながら、

乗って来たおばあさん。

つりかわをにぎりながらも、

よろよろ、よろよろ、

今にもたおれそう。

とつぜん、

横の友が立った。

「おばあさん、どうぞ。」

うれしそうなおばあさん。

わらっている友の顔。

そんなよい顔を見つめていると、

わたしの心は、

まっ暗な世界へ落ちこみそう。

できなかった小さな親切。

「小さな親切」を実行するには、勇気がいりますね。この詩は、そのことをとてもよく表しています。Y子さんのような経験をしたことのある人は、きっと多いことでしょう。

彼女は、〈満員電車〉に乗っていました。そこへ〈よろよろしながら〉、〈おばあさん〉が〈乗って来〉ました。すわる場所がありません。〈つりかわをにぎりながらも、／よろよろ、よろよろ、／今にもたおれそう。〉です。座席に座っていた彼女は、席をゆずってあげようと思ったのですが、すぐに行動に移せませんでした。すると、〈とつぜん、／横の友が立った。〉のです。そして、〈「おばあさん、どうぞ。」〉と、彼女の言えなかった言葉を素直に言ったのです。

〈うれしそうなおばあさん。／わらっている友の顔。／そんなよい顔を見つめていると、／わたしの心は、／まっ暗な世界へ落ちこみそう。〉になるのです。席をゆずってあげたいという気持ちがありながら、それが出来なかった彼女にとって〈わらっている友の顔。〉は、余計にまぶしく見えたことでしょう。

〈できなかった小さな親切。〉の後悔の念が、実に見事に表現されています。

(「子どもの詩を読む 我がクラスの詩」より)

4. おわりに

1) リセットして

科学の発達に伴い文化が発展し、我々の生活は非常に便利になった。しかし、そのことによって我々の生活が豊かになったとは言い難い。お金を出せば何でも買えるというように物質的には確かに豊かになったが、精神的には決して豊かになったとは言えない。

与えられたおもちゃやテレビゲームで育った子どもや大人は、創造力、想像力、表現力等が弱いと言われている。少子化が進みその中で育った子どもたちは、兄弟姉妹で切磋琢磨することがなく、自己中心的で思いやりに欠ける人間になりやすい。

飼っていたハムスターが死んだ時、「お母さん、早くリセットして生き返らせて！」と1年生の子が言ったという、愕然とするような事実がある。テレビゲームでは、死んだ者もリセットすれば生き返って、またゲームを再開できるのである。

このような世の中であるからこそ、子どもたちに豊かな感性を育むことが今強く求められるのである。

2) 生きる力の育成

「生きる力」は、平成10年改訂の学習指導要領で登場し、今回の改訂（平成20年）でも引きつがれている。「生きる力」とは、①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、②自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性、③たくましく生きるための健康や体力、である。

①は、生涯学習を見据えた情報活用能力（情報リテラシー）の育成を、②は、正に豊かな感性の育成を求めている。そして、③は、①、②の基盤として求められるものである。

「生きる力」を育成するために、豊かな感性を育成することは欠かせない。

参考資料

「ちがうぼくと とりかえて」 清水 えみ子 童心社

「校長室だより」第16号、第17号 山口市立湯田小学校

「先生、あのね 赤ペン入り」 神戸大学教育学部附属住吉小学校2年い組

「みんなの日記」 山口市立平川小学校5年3組

「小学校学習指導要領」 文部科学省（平成20年改訂）

「こどもと教育」No.121 神戸大学教育学部附属住吉小学校教育研究会

「児童詩教育入門」 江口 季好 百合出版

「子どもの詩を読む 我がクラスの詩」 阿川 士郎 泉菊印刷

「児童詩の指導」 阿川 士郎 大塚印刷